

令和七年秋号（2025年）

第544号



あたらしい道

【自分を拝む】

有難い自分になる

これがく　あたらしい道です

ほんとに

有難い自分

だったなあ

って云って

何れ自分を拝む時が
あるぞう
う
って

松本草垣女史語録

あたらしい道

令和七年 秋 544号

目次

テーマ「自分を拝む」

ことのは 自分を拝む（有難い自分）……………1

日本の国柄 『禅』と日本文化……………4

座談会 リバイバル 日本と日本人（有難い国日本）……………9

加賀田作 福島文右衛門
立山久秀 佐藤宗三
大井胤治（司会）内山正



寄稿 あたらしい道と宗教 — 東京 厚味三樹三郎 …… 22

寄稿 「四書五経」も道の教えから — 栃木 村里晃男 …… 30

日本人柄 埴保己一 — 静岡 内藤吉隆 …… 34

この道と おる道 アンパンマンの魅力 — 東京 佐瀬康志 …… 39

大和撫子 明治の紫式部「下田歌子」 — 神奈川 芹澤和彦 …… 42

編集後記 …… 52

(表紙題字 松木草垣女史御親筆 とびら書 松下賀奈子さん)





秋の旧林家（愛知県一宮市）

ことのは

「自分を拝む」(有難い自分)

何れ自分を拝む時がある

この道のお方 自分で自分を 何れはな さあ〜〜〜

思いわおに思わおって 思わおいして 拝む時がある

さあ〜〜〜 これが本当です 自分を拝むんですよ 何れはな

常世の理 (*巻末に関係記事)

もうこれ位で 常世の理とは お肚の奥から知らす

色々知らす そうなるのが この道であった

さあ分かりました

この道はな 自分のお肚で さあ〜〜〜

一切合財を 教えてくれる そういところす

有難い自分になるのがこの道

有り難い自分になる

これがくゝ あたらしい道です

さあ お分かりでしょう

何れ自分を拝む時が

とにかく 道の方はね

ゞほんとは有難い自分だったなあゞ

って云って 何れ自分を拝む時があるでしょう

でもそれは 何時も云いますでしょう

とにかく シシババたれている間はね

これはもう本当に 我々は俗物でしょうって ね

ですから 決して自分 威張っちゃいけませんよって

自分を拝む

自分で自分を 見てご覧なさい

〳何とも云えない己になったな〳

人の道より以上 有難いご自分 戴いてしまうだろう

もうこれ位で 自分として 自分を拝む

そういう時が 何れある それがこの道 有難いだろう

自分をフツと拝みたくなる

〳成程なあ 今までそれ程とは知らなかった

やっぱりそれだけ 理が濃いなだなあ 何と自分達よかったなあ〳

とね 自分で自分を拝んじやいますよって

フツと拝んじやいますよって ね

でもそれは瞬間なんですよ

〳自分は偉いんだ〳〳〳〳〳〳〳

と拝んだら それは間違いです

そんなことしたら もう呆れますよね

(松本草垣女史語録より抄)

『禅』と日本文化

編集部

お寺の座禅会などにより、「禅」の修行法である坐禅は広く親しまれており、自己の精神を高める方法として、外国でもよく知られています。

禅とは、仏教の一派である禅宗の略称ですが、元はサンスクリット語の「ディヤーナ」を音訳した「ぜん那」の略で、精神を統一することを意味し、坐禅がその方法となります。

禅宗は、日常生活のあらゆる行為を修行となし、特に坐禅を通じて自己と向き合い、直感的な理解や体験から悟りの境地に至ることをめざしています。

鎌倉時代、宋から伝来した禅宗は、日本古来の文化と出会って、単なる宗教の枠を超え、日本人独自の精神性を形作る礎となりました。

茶道、華道、書道、武道、建築、庭園、文学、芸術など、日本文化の深層には「禅」の精神が流れており、無駄を削ぎ落とし、自然と一体となり、心を統一し、真理を追究する「禅」の理念が息づいています。

例えば、石庭に見る簡素の美、わびさびの美意識、一期一会の心——それらは、禅の教えが日本人の心に深く染み込みながら、日本独特の精神性に昇華されたものと言ってよいでしょう。

★禅の歴史的發展

一・起源と中国への伝播……禅は、紀元前五世紀頃、インドの釈迦が坐禅によつて悟りを開いたことに遡ります。六世紀頃、インド出身の達磨大師だるまだいしが中国に禅宗を伝えました。彼は經典や言葉によらず、坐禅を通じて直接的な悟りを開くことを重視しました。中国では、特に唐代に栄えました。

二・日本への伝来……禅は鎌倉時代（十二世紀末から十四世紀初頭）に、栄西が臨済宗を、道元が曹洞宗を、中国から日本に伝えました。鎌倉幕府は、生死の覚悟を必要とする武士の精神的支柱として禅宗を保護したことから、武士や庶民の間で広まりました。

また、江戸時代（十七世紀）に明国の隠元いんげんが黄檗宗おうぼくしゅうを伝えました。

三・近代以降……明治時代（十九世紀中期）、

禅は釈宗演師しやくそうえんにより西洋に紹介され、二十世紀には、鈴木大拙だいせつ・鈴木俊隆しゅんりゅうらにより、世界的に広まりました。

現代においても、坐禅によるストレス軽減や集中力向上などの精神力向上効果が期待され、また「公案」と呼ばれる禅問答により、課題対応能力を高めることに役立つとされることから、今も世界的に普及しています。

★日本の禅宗

日本の禅宗には、三つの主な宗派があります。いずれも、坐禅を修行の中心とし、自己の内面を見つめ、自己の仏性を発見して悟りを啓ひらくことをめざしています。

臨済宗りんざい 坐禅をしながら「公案」（師匠が弟子に与えた問いかけ）について考えぬくことで、

心の迷いを取り払い、悟りを啓こうとします。

(Ⅱ「看話禪」)

曹洞宗 自分の中に仏様の心があると信じて、

ひたすら坐つて自分と向き合うことで、その心を見つげようとしています。(Ⅱ「黙照禪」)

何も考えずに、ただ座っていることが悟りであると考えられます。(Ⅱ「只管打坐」)

黄檗宗 自分の心の中にこそ仏が存在すると信じ、内省を深めて、坐禅をしながら念仏を唱え、自己の仏性に気づく修行をします。

★代表的な人物

栄西(1141～1215)

それまでの仏教を立て直すべく、二度にわたって宋に留学し、当時南宋で隆盛だった臨済宗を学び、日本で布教しました。

また、帰国の際に茶の種を持ち帰って栽培を

始め、貴族だけでなく武士や庶民にも茶を飲む習慣が広まるきっかけを作りました。

著作の『興禪護国論』は、禪宗の教えが国家の繁栄に不可欠であることを説き、禪宗の正当性と重要性を主張しました。

また、『喫茶養生記』では、お茶の効用や製法・淹れ方などを著し、茶文化の発展と茶道の精神的基盤を築くもととなりました。

道元(1200～1253)

曹洞宗の開祖であり、禪の教えを日本に根付かせた人物です。

『正法眼蔵』は、道元が約二十年間かけて執筆し、禪の核心を、自身の体験に基づいて独自の言葉で説き明かしています。

坐禅の実践や悟りの境地などを詳しく説き、坐禅を通して自己を確立し、真理に近づくこと

を具体的に示しています。

坐禅は何かを達成するための手段ではなく、「ただひたすらに坐る」こと自体が仏の境地を現成すると説きました。

また、自然と人間との調和を重視し、禅の教えを通じて人々が自然との一体感を強めることも説いています。

隠元いんげん (1592～1673)

江戸時代前期に中国から来日し、日本に黄檗宗を伝えました。また、インゲン豆、スイカ、レンコン、寒天などをもたらし、日本の食文化に大きな影響を与えました。

鈴木大拙すずきだいせつ (1870～1966)

日本の禅を西洋に紹介した先駆者であり、禅に関する論考を英語で著し、国際的な禅の普及

に貢献しました。

多くの著書を執筆し、特に『禅と日本文化』や『禅の心』などが有名です。

彼の著作は、禅の哲学や実践を分かりやすく解説し、特に西洋人に理解しやすい形で提供しました。

教育者としての役割……アメリカで教鞭をとり、禅の教えを広めるために尽力しました。彼の講演や著作は、禅が持つ深い哲学的な側面を多くの人々に伝えることに成功しました。文化的な架け橋……禅が日本文化に与えた影響を強調し、禅を通じて西洋と東洋の文化交流を促進しました。

*日本文化そして世界の禅

禅は今や日本文化に深く根ざした思想として、日本文化の世界的な波及とともに、その教えは

世界に発信され続けています。

禅の実践や哲学は長期にわたって日本社会、日本の習慣、日本人の生活に重層的で多様な影響を与えており、現代社会においてもその精神的分野における重要性は変わりません。日本のいいところを代表する文化のひとつと言えます。

★禅とあたらしい道

禅の教えは「不立文字」^{ふりゆうもんじ}「教外別伝」^{きょうげべつでん}「直指人心」^{じきしにんしん}「見性成仏」^{けんしょうじょうぶつ}すなわち、言葉にとらわれず、直接、心と心で真理を伝えることを旨とします。曹洞宗では、その極意は「只管打坐」^{しかんたざ}（ひたすら坐る）にあります。坐禅は、己の内なる雑念を払い、天地自然と一体となり、「無我」の境地に達するためのお行です。禅僧は「喝！」と一喝し、弟子の迷いを断ち切り、即座に本質に目覚めさせようとします。

この「無我」の境地は、あたらしい道の教えに通じています。「己を磨き、己を超え、全体の中で己を消していく」——これはまさに、禅の修行の核心であると同時に、あたらしい道で言われる、「自分を掘り、陽気になつて、またまそのものになる（天意に添う）」ことです——。つまり、禅の教えが示す「無我の行」は、己を磨き、「有難い自分を拝む」ようになることです。

ただ、あたらしい道は思、い、からなつた道です。己の思いを吟味することから自分を建て替え、さらに人を救う道に入っていきます。個を超えて全体に生きることに目標をおいています。

リバイバル座談会

有難い国日本

日本と日本人

(昭和五十九年)

*天皇と国民

内山 今日には「有難い国日本」というテーマで、皆さん方の持ち味をお聞かせ頂きたいと思
います。

日本という国は、有史以来二千六百何十年、
それ以前まで遡りますと昨今の色々な出土品に
よって、十万年も二十万年も前に民族が住んで
いたという歴史が明かされるといふ風に、非常

福岡 加賀田 作
福井 福島文右衛門
熊本 立山久秀
東京 佐藤宗三
埼玉 大井胤治
司会 内山 正

に古い国なんです。こうした何十万年という
歴史の中には、何とも言えない、素晴らしい日
本の国柄の良さがあるわけでしょうね。

今日は、あらゆる角度から、皆さんの持ち味
を出して頂いて、日本人が本当の自分の国を
知ってもらう上に参考になれば有難いと思いま
すので、遠慮なく思うところをおっしゃって下
さい。

加賀田 私はどうしても、日本の国の一番の特色である国柄といえますか、国体というか、国が肇つて以来の、天皇を中心とする「国体」ということが、まず一番に浮かんできますね。こういう素晴らしい天皇陛下を戴いている国は他にはないですからね。これが我々としては最も有難いことなんでして、陛下のお陰で国が保つてきたんだという点をまず申し上げたいと思います。

それから、陛下が常に無私のお行——責任を全部ご自分が取られるというお行——をしておられることを、ある機会に青年団の人々に話しましたら、それは初めて聞いたというんですね。学校でも教わっておりませんし、社会一般もなるべくそういう事は触れないようにしていますから、知らないのは無理ないと思いますね。

福島 私、テレビで見たのですが、陛下が「名

もない草」と誰かが言っているのをお聞きになつて、植物学者でもいらつしやる陛下は、「名もない草つて、名もないことはありませんよ、みんな名を持つてゐるんです」そうおつしやつたことを聞きましたね、一本の草にさえ、それだけの愛情を注がれておられるんだ、そう思ひまして、本当に驚くやら嬉しかつたやら、そんなことがございました。

それからまた、話は変わりますが、陛下御招待の晩餐会では、一時間でも三時間でも誠をもつて臨んでおられますが、それを世界の人々がよく知つてゐるんですね。何かの調査で、世界の三十五ヶ国の元首が陛下にお目に掛からせて欲しい、ほんの暫くでもいいのでお目にかかりたいと、三十五ヶ国の元首が口を揃えて言つているというのを讀みまして、日本の良さはここににあるんだなあ、と思つたことがございま

た。

内山 天皇陛下の有難い面のお話を戴きました
が、今度は、国民の面、日本民族として何かあ
りましたら、どうぞ。

立山 私は、「日本の国」というものについて
思っただけで、本当にどうしようもない程嬉
しゅうございます。そのわけは日本の家族制度
ですな。これがやっぱり素晴らしいものと思
います。

天皇陛下を大御親おおみおやとする一大家族関係が
ズーツと昔から保たれてきています。それを元
として家族制度が成り立っていると思えますが、
こういう国はどこを探してもございません。そ
の基本は教育勅語でもって示されておりますが、
それを見て外国の偉い人は大した国だとびつ
りしている訳です。

国費を使って日本にそれを習いに来ている訳

であります。一例を挙げると、ドイツが日本の
勅語を元にして家庭を整えさせて国力が強大に
なったと聞いております。その他色々ございま
すけれど……。

内山 また、日本民族は、他の国の民族とは違っ
た何とも言えん情緒的な民族であるとか言われ
ておりますが、そのあたりは、いかがでしょう
か？

★言霊ことばたまの幸国

佐藤 確かにおつしやられるように、日本人と
いうのは、外国の人に比べて色々な面で特殊性
というものがあると思います。これは逆説的な
言い方なんですが、日本人としていられるには、
二つの要素があると思うんです。一つは「日本
語を話す」ということ、もう一つは日本で採れ
た穀物、特に「お米を頂く」ということ。この

二つがどうしても欠かせないものだと思うんです。

例えば、外国に住んでいる方のお顔を拝見しますと、日本の国土で生活している方とはちよつと違つた印象を受けることが多いんですが、これはやはり自然環境だけじゃなく、毎日日本語をしゃべれない、また日本のお米を召し上がれないことが大きな原因になっている感じがするんです。

お米につきましては、もうご承知の通りで申し上げませんが、日本語という点ですね。特に昔から伝わっております「大和言葉」というものが、「ことだま」という問題に到着する大事なものと思うんです。

ご存じのように、万葉集にある柿本人麻呂の詠いました、

四季島の 大和の国は

ことだまの さきわう国ぞ

まさきくありこそ

という和歌ですね。これは遣唐使に対して贈つた歌だそうです、あの折口信夫博士がこういう風に訳されているんです。

「大和の国は、言葉に潜んでいる精霊が不思議な作用を顕して、人に力添えをしてくれる国である。私が今こうして祈っているのだから効き目のない訳はない。どうぞ、無事でいらしてください」と、このように言葉がことだまとなつて能きはたらが出るんだという意味と、もう一つこれは漢文学に対して、日本では元々古来からことだまという、素晴らしいものがあつたんだという意思表示であり、誇示したものであるような気が、私はするんですね。

で、このことだまのさきわう時代というのは、やはり、知恵や心じゃなくてみたまさんが十分にいた時代じゃなかったかなと思うんです。それだからこそ、ことだまも勢いよく能きが出るわけで、現代のように知恵や心の先行する時代になりますと、ことだまの本当の能きは弱っているんじゃないか、その為に我々はみたまさんをきれいにさせて頂くことによつて、ことだまのさきわう世の中に戻らして頂けるんじゃないかと、そういう風に思っているんです。

★神代時代

内山 日本には神代時代かみよというのがあるんですね。本居宣長が「その時代に生きた人たちが、神様のような人たちだったから神代時代というんだ」と言っていますがおやかたさまは、我々の遠いく先祖さんが皆「みたま通り」に生き

たんですよと、こう言われるんですね。

やはり、現代の我々の世界から見ると、それこそ、尋常ならざる神様のような生き方と、こくなるんじゃないでしょうか。当然、そういう時代は、みたまが能いて「みたまのまま」の生き方ですから、言葉一つにもみたまが能く、みたまによつて手足を動かす、総て一切が身の内のみたま通りに思わされ、言い、行動した訳ですね。

この神代時代というのは、竹内文献に「よりますと天神時代、それから上古時代、鵜草葺不合朝うがやふきあはずちよ、次いで神武、つまり歴史時代に入るんですが、大体、鵜草葺不合朝を云う訳ですね。

この神代時代も何億年という長い時代過程があるんですが、ここでは割愛させて頂きます。この中、今申し上げた上古時代というのが本当

にみたまそのものの時代、つまり、神代時代の最もエキスになる時期なんです。それが歴史時代に近づくにつれて人間の主観というものが能き出し、みたまの能きが鈍つてきたと考えられる訳です。

それとね、この日本の風土、これまた世界に類がないんですね。敷島の国と言われているように、四季の変化の明瞭さ、さらに山水美の景觀の美しさ、そして、国土が南北に長くて寒帯から亜熱帯までの気候が具わり、秋には台風雨があるかと思うと、冬には世界でも有数の豪雪を見る地帯もあるという状態なんです。そういう風土の中に長年住みついておきますと、そこに自ずと風土によつて人間が形成されるという絶対の面があるんですね。

ですから、そういう処で育ち、そして、代々続いてきた中に色んな人物が出ておる訳ですよ

ね。

大井 そうですね、私も日本で動かないものと言つたら、風土土地だと思ふんですね。私の田舎は陸中海岸の南なんですけれども、あそこの海岸の風景を扇谷正造氏おうきやしょうぞうという評論家が、地中海に世界的に有名な風景のある場所があるけれど、それ以上だと言っているんですね。

例えば、落合直文おちあいなおぶみの実家であつた、鮎貝という処は本当の田舎なんです、ああいう処から幕末の頃に、当時の殿様の次男坊が養子に出されて行つて、一事に徹してついに日本の国の真髓を盛り込んで、当時の教科書の編集をなさつたというような人物も出ています。

後年の立派な人物は、一種の武士的氣迫を持つて育つた事実を見ましても、自然と密着した生き方をしていたことは見逃すことはできないと思ひます。

その意味でも、この道で教えられている「元に戻る」ということを念頭に置いてやっていく時代が来たと、そう思いますね。

* 「武侠」のころ

加賀田 やはり、日本人として一番有難いのは、国が今まで続いてきたということですね。その元は肇国の精神から始まるんですね。天意によって成った国であり、絶えず天意が能いておる訳で、歴史の筋目々々には、何かの形でそれが能いているという感じを受けますね。ですから、外国とは全然違う国である所以が歴史上の人物で表現されておると受け取る訳です。

例えば、仏教が入って来て道鏡なんか出たときも、和氣清麻呂が一つの能きをしていますし、それから大化の改新の中大兄皇子、藤原鎌足、吉野朝南北時代では後醍醐天皇、楠木正成等、

それらの能きがどういう方向にどのようなに能っているかと考えますと、共通して国体をいかにして護持するかという面に向かつておる訳ですね。

これはみたまさん、ずーっと伝わった本当の日本人の大和魂というか、日本精神の根本がそういう時にパーツと光を放ちながら国体を護持し続けた、それが人物像に於いて具現したと思っております。

そういうことが、段々、庶民の間においても義民伝の佐倉惣五郎とか、あるいは侠客の清水次郎長とか、「侠」という能きとなって世の中に根付いて伝わってきたという感じも受けますね。

大井 要するに、外国人が他国を侵略するようなんじゃなくて、義のために武術を生かすという生き方で今まで来ているんですね。

支那革命のときに、孫文を援助して日本人が
あちらに行つて色々他国の独立のために努力し
たとか、いうことがありますね。

その中には、あの中村屋の丁稚さんがインド
の首相をかくまつて英国の迫害を防いで、官憲
の手から逃れさせたという、こういう武俠精神
があるんですね。歴史を振り返つてみましても、
そういう事を多分にしてきている訳ですね。

★肚でゆく「和」

福島 話は少し戻りますが、日本人の特色は何
だというと、一つは「有難うございます」とい
う言葉、そりや、外国にも「サンキュー」とい
う言葉があります。しかし、それはただお前に
サンクスするぞということなんですけれど、日
本人の有難うございますは、人さん全部、それ
から天地全部、山にも川をもすべてをおろがむ

意味が込められている訳ですね。

それから「勿体ない」という言葉は日本だけ
のもので、おそらく外国にないんじゃないかと
思います。いつも勿体ないく、という思い、日
本人は自然の恩恵によつて生かされていること
を知っているからでしょうね。従つてまた、お
日さんをお拝み、お月さんをお拝むことも日本人だ
けであろうと思うんです。

その他に、先祖を大切にする、もう一つ付け
加えれば「和を以て貴しと為す」と聖徳太子が
言われましたが、これらが日本人らしい外国の
文化と違う大きなものであらうと私思うんです
……。

内山 ここで改めて、この道の教えを元にして、
外国にない本当の有難い国という本質的なもの
をまとめてみたいと思います。

秋深し となりは何を する人ぞ

佐藤さん、これは芭蕉の句ですけれども、要するに秋深い何となく寂とした自然の気の中で、何かしら人恋しい、それで隣の人に思いを寄せる。何か和を成さしめる裏付けというような、日本人の情緒の面ですね、その辺のところを一つ、具体的に出してみても頂けませんでしょうか。

* 「自然」とともに

佐藤 そういう意味からいきまして思い当たるのは、幕末の歌人で国文学者であった、福井の出身の橘曙覧たちばなあけみという方ですね。

あの方は橋本左内はしもとさないと同郷で、非常に勤王の志の強かった人なんですけれども、その一面、清貧に甘んじて色々と本当に温かい面を持った歌も書かれています。

その方の歌に、自分の支えと言いますか、色々と生活の上における哀歓を歌っている訳なんですけれど、その中の一つに、

樂しみは 心をおかぬともだちと

笑い語りて腹をよる時

というのがあるんですが、要するに、おやかたさまがよくおつしやいますが、これからは地味な時代になると、派手なパーティーやなんかじゃなくて、本当に気の合った仲間が集って茶飲み話をして喜ぶんだと、それが本当の無上の喜びになるという。

やはり、日本人というのは隣近所が本当に仲良くして、お米が足りなかつたら足し合ったりして助け合う。そういう風な心の温かい民族じゃないかなという気がしますし、そういつ

た美しい日本人の特性に戻らなければいけないという気がしています。

それと今度は又、別の面なんですけれども、今までに皆さんが言われたように、各時代における色々な傑出した人物が出て、日本の国を支え、また、その神秘が能き今の日本が連綿と続いてきたという、そういう人物とは別にですね、逆に無常観と言いますか、もののあわれという面を非常に主張して世捨て人的な生活をした人、具体的に名前を挙げますと、西行法師さいぎょうほうしから芭蕉ばしやうへ、現代で山頭火、放哉や牧水という流れがあると思うんですけど、そういう風なものにあわれということに対して、日本人はまた非常に共感を持ち、実際に自分には行わないにしても、そういう生き方をした人に、非常に好意を持って見るといふ面がある訳で、やはりその、自然に没入する、自然に融合するということが、日

本人の特色の一つじゃないかなと思います。

ですから、死ぬということに対して、あまり恐怖感とかは抱かないで、自然の中に融け込む思いと言いますか、まあ一口に言つて親近感——そういう面を持つていると思うんですね。西行法師にしても、伊勢の神宮にお参りしたときに詠まれたのが、

何事のおわしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるる

という歌ですね。要するに、目に見えないところで何かに崇敬するという面ですね。

やはり、これは天皇陛下に対する我々の思いにも通ずるんじゃないかと思うんです。具体的なものよりも目に見えない素晴らしさをおろがみ戴くということが、やはり、日本人に脈々と

波打っているんじゃないかと——そういう風な
気がします。

大井 短歌でね、

くずの花 踏みしたかれて色あたらし

この山道を行きし人あり

というのがありますが、山里を行つたときの、
そこに人のなつかしさがわいた情感——何か自
然のいい情景が浮かびますね。

* 「大義」と神秘

内山 日本人はみたま通りに生きる、つまり、
義に生きる義の民族と言われますが、その時代
に生きた人間を通して、あるいは大自然を通し
てなされてきた訳ですよ。そういう場合の日
本人の生き方——つまり、大義に生きるのか、

そのためにはどうか、万葉の時代から現代に
至るまでいくつか我々の先祖は通つて来ていま
すね。何かそういう面で日本人の特殊性として、
人物を通してでも、時代を通してでも結構です。
一言お願いします。

加賀田 私は国難というときすぐ「元寇」を思い
出すんですよ。あのときもね、龜山上皇をはじ
め、皇室も国民も身をもつて国難に当たらんと
しましたね。北条時宗の元寇に当たる気概はす
ごかつたんですね。

防塁の遺跡を見ても、大きな石小さな石、色々
積み重ねられていますが、各藩に割り当てて
ダーツと作ってしまった。力のあるものは大き
い石を、女子供は小さいのを持って行つて築い
たんだと思うんですね。

日本人というのは、何かことがあつて「国」
ということになると、パーツとこう結束する能

きを現わすんですね。生き甲斐として務めを果たすのは、当たり前じゃないかという風に、わき上がるものがあるんですね。それは元寇だけじゃなくて、国が危ないときには、常に一致結束して立ち上がったんですね。

おやかたさまがおつしやる「成つてくる姿を喜ぶ」とか「人を戴く」とか「苦を苦とせず」とかね、要するに対立をしない「和」の精神——これはやつぱり、日本の根本的な特性だという気がするわけですね。

それでまあ、文化という立場から見えますと、元々惟神の日本があつて、例えば、儒教、仏教、キリスト教のような外国思想が入つて来ても、これを排斥しないで幅広く全部を取り入れてしまふ。そして、同化して日本式に皆変えてしまつているんですね。他の良いところを戴いて自分のものにする。ですから全く対立があ

りません。絶対ですね。

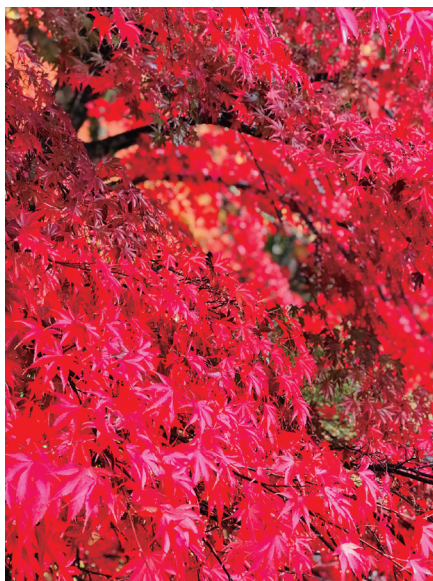
内山 日本の国柄の本質というものは、やはり、天皇と国民が親子であるということをや元にして、代々生きて来た中に日本人の本当に得も言えん、人情味豊かな面とか、人のためには、という義の面とか、色々な持ち味がかもし出されて、昔からズーツと続いてきた訳で、この辺が得も言えん、日本の国の有難さの一面になっているんだと思いますね。

ところが、残念なことに、今の世の中にはそういう素晴らしいものが、もう本当になくなってしまつていますね。古い歴史を持つ日本が現在まで、民族精神の中に生き続けて来た、親子を軸とする思い方が変わつてきている、ということは大変なことだと思ふんです。今の時代は、親を否定する、否定しないまでも戴く思いがなくなりつつある訳で、言ってみれば、素

晴らしい歴史を否定するような、有難い先祖さんを否定するような思い方になり下がってしまったところに、日本の国が危ない根本原因があると 생각합니다ね。

この道で教えを受けている我々は、日本の国の有難さという面を、色々な機会を通して、もつとく強く訴えて、分かって頂く努力をしていくことが大切じゃないかと思っています。

この辺で終わらせていただきたいと思います。本日は皆さん、どうもありがとうございます。



紅葉（那須塩原市）

あたらしい道と宗教

東京 厚味三樹三郎



〈編集註〉

著者は、キリスト教の歴史を書こうとして、思わず「あたらしい道と宗教」に思い至ります。

さらに、宗教は「心を操る寄生物」との最近の論考に触れ、「あたらしい道はやはり、宗教などの影響の連鎖を断ち切るべき」との感懐を新たにします。

西洋の神と日本の神を比較しながら、この道を、宗教っぽく捉えがちなことに警鐘を鳴らし、自身も反省しながら振り返った随想です。

★宗教は「心を操る寄生物」？

船長協会会報（一般社団法人 日本船長協会発行）の「読書徒然シリーズ」に、船に祀られる神棚の神（金刀比羅）の話を書いた後（以前から度々掲載されている）、昔読んだポール・ジョンソンのキリスト教の歴史でも取り上げて

みよやかなどと思い、もうすっかりページの色も変わり果ててしまっているペーパーバック版を取り出して、読み直しているうちに、キリスト教の創成期である三世紀頃までの歴史で、以前読んだ時に気が付かなかった著者の言葉に行き当たりました。

それは、キリスト教創成期のグノーシス派(現在では異端とされています)の説明のところ、グノーシス派の信条である「世界は善と悪」で構成されていると云う二元論と、真実の暗号の存在と云う、ギリシャの文化の知識への信条が、キリスト教を宿主とする精神的寄生虫(生物?)のようであった、と書いてあるところです。

当時この言葉に気が付かなかったのは、私がこの本を最初に読んだ時は、まだキャスリン・マコーリフ氏の「心を操る寄生虫」を読んでいなかったため、著者の意図が汲めていなかったからです。

パラサイトと云う言葉を見ると、私などは、直ぐにカマキリを潰した時に其の腹から現れたハリガネムシや、人間に寄生するサナダムシ、回虫などの寄生虫を連想してしまいますが、「心を操る寄生虫」では、「寄生虫」ではなく「寄

生生物」ですので、文字通り、植物やカビ(菌類)、ウイルス(生物ではないとも言われています)も含まれていることになります。

この寄生虫は、自分たちの生存のサイクルに合わせて宿主の生態、行動を支配して変えて行く状態を解説しています。この支配すると云う書き方について、養老孟司ようろうたけし氏は、「この考え方は一神教の考え方です」と注意してくれていますが、私は、日本は古代から多神教のかなながら惟神の文化ですので、一つの神どころか諸々の神々に支配されることはない、と云う意味と解釈しましたが如何でしょうか。

寄生虫は、その種の保存のために、その卵から、幼虫、成虫といった生命サイクルに合わせて、次々とヒツチハイクするように宿主を乗り換えて行きますが、その過程で、宿主の脳や神経系を通じて、宿主の行動を制御或は支配し

てしまう方法と、宿主の身体の一部の形を変え
る方法と、ある特定の蜂と蜘蛛との間の関係の
ように、卵を産み付けた宿主をゾンビ化（冬眠
状態）して、魂を抜いた状態にして、卵が孵つ
た後に幼虫の栄養分とする方法の三通りがある
そうです。

例えば、鴨などのような水鳥を最終宿主とし
て繁殖する寄生虫は、鳥の糞から先ずバツタの
ような昆虫に入り、バツタの体中である程度ま
での成虫になると、その宿主を水に飛び込ませ
ます。宿主とされた昆虫の集団自殺は、自然界
で良く観察されるそうですが、エビなどの水中
生物に捕食させ、次にその宿主であるエビが、
次の宿主である鴨などの水鳥に捕捉されやすい
ように、その行動を好光性に変えて水面近くに
浮き上がらせたり変色させて、最終（？）生命
循環ですので、この言葉が適当なのかどうか良

く分かりませんが）宿主の捕食者に発見され易
くするようにしてしまいます。

「心を操る寄生生物」を読んだことによつて、
私にこんな後知恵がつかまりましたので、ポール・
ジョンソンが「キリスト教の歴史」で、初期の
キリスト教の一つの派で、ギリシャ文化のグ
ノーシス主義（知識・善と悪の二元性の世界、
言葉或いは秘密の文書と云う、二つの信条が中
心となる。）によつて、キリスト教をユダヤの
歴史文化から切り離して語ろうとしたグノーシ
ス派が、「宗教を宿主として利用する精神的寄
生虫（キヤスリン・マコーリフ氏流に言えば「寄
生生物」）でもある。」と云う言い方が、改めて
私自身の、思想とか宗教に対する理解を語つて
くれているような気がしました。

★道友にとってあたらしい道は宗教か？

もう四十年以上も前になりますが、私は松の間でおやかた様が、

「あたらしい道は宗教ではありません。でも皆さん方にとっては宗教かも知れませんか」と云われたことを鮮明に覚えています。宗教

と云う言葉は、元々は仏教の原理や真理を意味する、「宗の教え」のことだそうですが、幕末期レリジョン (Religion) の訳語が必要となつて、明治期になってキリスト教の国内布教が認められてから、広がったと云われています。Religion は、語源的には、ラテン語の re 「再び」と ligare 「結びつける」が組み合わされた語で、神と人を「再び結びつける」と云う言葉です。キリスト教では、もともと、人が唯一神を信じるか信じないかの前提は、個人と神の契約であるようですが、カトリックでは、自分の

神として信じるか信じないかの契約を明確にする堅信 (Confirmation 又は Chrismation) と云う儀式を、十四歳の時に決めることを要求されます。

★惟神の道でも精神的寄生虫の要素が？

ポール・ジョンソンは、思想 (文化) が宗教を宿主とすると云っているようですが、私自身は、この宗教 (多神教も含めて)、思想、信条といったものは、自分自身の判断で決められまじ、しかもそれが決定した後は、本人本来の意識とは関係なく、その精神的目的を達成するように、宿主である信徒の行動を支配 (?) して行くところなど、宗教自体も精神的寄生虫 (生物) と同じ働きであるように思えるのです。

私自身は、一休さんが、親しくしていた一向宗 (西方浄土の阿弥陀如来信仰) の蓮如をから

かつて詠んだと云われる、「阿弥陀とは南（みなみ、皆身）にあるを知らずして、西（西方浄土）を願うははかなかりけり」とか「阿弥陀には誠の慈悲はなかりけり 頼む衆生のみを助ける」なんて云う言葉に感心しています。

日本の古い信仰は、森羅万象に神が宿る。オオカミ、キツネ、タヌキ、蛇などにも、人になり力を認めて神（？）の仲間になっていますが、ある時代から人の場合は、天神様や崇徳上皇、平将門のように、不遇の中に亡くなった人の怨念が、崇らないように神として祀ったものが多いようです。しかし、紫の間の掛け軸では、天の下に人と神が同列にあります。これがこの国の古代の惟神の信仰であつたのではないでしようか。

「おしえのいづみ」二五二頁の「かむはかり」の冒頭に「肉体をわけた元々の神の示しがあつ

たので、その示しを知らずに、わがものと思うはきちがえを神は六字にふみならず、今の日の本にしつかりたたき込む。かむはかりをおしへたら、なにもかにもごうの巢である。」と云うお言葉があります。私は、このお言葉の「六じにふみならず」と云う意味がずっと曖昧のまままで過ごしておりましたが、最近このページを読み直していて、「肉体をいくつにも、わけた……」と云うところから、昔「仏教の思想」で読んだ、五感と意識の六根（唯識ではこれに二層の無意識を加えているようです）「言、耳（聴覚）、鼻（嗅覚）、舌（味覚）、身（触覚）、意（意識）」と云う言葉に思い当たり、さらに修験道を写したテレビの番組で、修行者の集団が、険しい山道を登りながら「散華々々六根清浄」などと唱えていたシーンを思い出しました。

★人の意識は量子力学的？

おやかた様のお言葉で「この道は何れ学問に成る」とも聞いていますので、科学的な言葉を借りることにしますと、二〇二〇年にノーベル物理学賞を受賞したイギリスの物理学者オロジャー・ペンローズと云う人は、人の脳は量子コンピュータであつて、人の意識は量子的であると云っています。現在は量子力学の理論を用いて、CTスキャンとかレーザーを用いる技術が実用化されて、量子コンピュータまで創られようとしています。量子の物理的特徴としては、次の六つがあるそうです。

- 一、粒子と波の二重性を持つ。
- 二、観測される迄実在しない（非実在性）
- 三、位置と速度は同時に決まらない（不確定性）
- 四、エネルギーの壁をすり抜ける（トンネル性）

効果、壁に向かってボールを投げると、

壁の反対側にボールが現れるような現象）

- 五、一旦関係が出来た量子どうしは、距離に

関係なく、一方の状態が決ると、光の速

さを越えて瞬時に、他方の状態が決る。（量

子もつれ）

- 六、二進法（0と1）のコンピュータのビツ

トを例にとると、どちらのビットも0と

1の状態にある。（量子重ね合わせ）

つまり、人の意識（思い）が量子的であると

すると、思想、宗教を含め、個人の意識、思い

方は、あらゆる周囲の環境に影響（伝染して寄

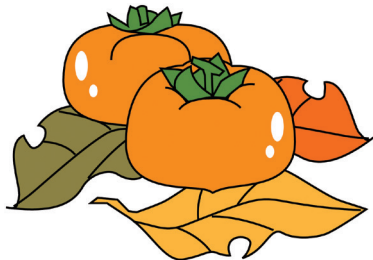
生生物的に働く）を与える、この道で云われる

「思いが変われば、環境が変わる。」と云うこと

になります。

★宗教などの影響の連鎖を断ち切る

この思いによって環境を変えてくださるのが「みたま」であって、私たちの役割は、あたらしい道によって、生物としてのDNA的な連鎖も含め、思想、宗教などの影響の連鎖を断ち切ることであると思っています。





秋の小径

「四書五経」も道の教えから

栃木 村里晃男



私が小中学生の頃、父がよく詩吟を詠っていたことを思い出します。

頼山陽らいさんようの川中島おほこが十八番でした。

「鞭声むち粛々 夜河を過る……」

子供心に軍人（父は志願兵でした）であった父の精神が、凜とした声が勇ましく感じられたことを懐かしく思い出します。

このように古き日本では、童謡や民謡以外に男性が謡うとなれば漢詩というのが当たり前の時代がありました。日本では、明治になるまで「詩」といえば漢詩のことでした。

詩（漢詩）を吟ずるから詩吟です。

文学の一形式として「詩」という語ことばを使って表現するようになったのは、文明開化以降の西洋文学の影響からです。

古来、私たち日本人の祖先は東洋古典を読むことによつて自らを磨き高めてきました。

漢詩の元をたどれば五経の一つである「詩経」に至ります。五経は儒教の基本経典ですがその上に四書があります。四書とは、「論語」「大学」「中庸」「孟子」の四つの書物です。

「大学」が四書の入門であるのに対し、「中庸」

は四書の中で最後に読むべきものとされます。

「四書五経」は、江戸時代に寺子屋を通じて広く庶民に古典教育として施されました。

「四書五経」は、人格の根幹をなす上で大きな働きをしたと言われています。

「論語」の中で孔子は「中庸の徳たるや、それ至れるかな」と讃嘆しています。

それよりのち、儒学の伝統的な中心概念として尊重されてきました。

「論語」の後段では中庸を「民に少なくなつて久しい」と説き、この「過不足なく偏りのない」徳は修得者が少ない高度な概念と書かれています。ここに深い意味があるのです。

このことは「あたらしい道」の何事にもこだわらない、すべてをありのままに受け入れる「根の教え」が天地創造の根本理念として孔子のよきな思想家(紀元前五五二年〜紀元前四七九年)

にも人間の叡智として影響を与えていたことを物語っています。元、元、元の元は、天、おやかたさまに通じるのです。

やすおかまさひろ
安岡正篤先生に師事し、論語を極めた関西師友協会で有名な伊與田覺先生が「中庸」について書かれています。(以下要約)

中庸に「君子は、其の位に素そして行い、其の外ほかを願わず」とあります。立派な人物は、自分の位置にふさわしいあり方を自覚し、それを過あやまたないようにつかり務めている。それ以外のことに心を煩わされないものだと言っています。人間にはすべて自分の位置というものがあります。例えば、自分は親に対しては子という位置にあります。子供が生まれれば親になります。同じ人間が親になつたり子になつたりするわけです。

中庸はさらに、「富貴ふうきに素しては富貴に行い、

貧賤ひんせんに素しては貧賤に行う」と説いています。

地位も高く財産も十分にある時はそれらしく振舞うこと。しかし、失職して収入を失つたり、高い地位から下に落ちたりすることもあります。そうなれば、やはりそれらしく行動することが大事です。

さらに、「夷狄いてきに素しては夷狄に行う。患難かんなんに素しては患難に行う」とあります。

中国では自分のいるところを中華と呼び、周辺国を夷狄として野蛮な国と見なしていました。人生では時にそうした本意な場所に身を置かざるを得ないことがあります。

さらには患難、すなわち憂いごと、思うに任せないことにもたくさん遭遇するものです。しかし、人は夷狄にあつても患難にあつても、いたずらに嘆くことなく、その状況の中で自分ができることを精一杯させていただくことが大事

です。

そして、「君子入るとして自得せざる無きなり」です。自得とは自らを満足するという意味です。要するに立派な人物は、どこへ行つても不平不満を抱くことなく、自分のいるべきところはこのだと肚をくくり、その位置にふさわしい生き方をしていくということです。

孔子は「君、君たり、臣、臣たり、父、父たり、子、子たり」と説いています。つまり君主は君主らしく、役人は役人らしく、父親は父親らしく、子供は子供らしく生きていくようにということです。

ここで言う「らしく生きる」というのが、まさしく「中庸」の「素して行う」です。

私たちは誰しも、何らかの位置について社会生活を営んでいます。一人ひとりがそのことをしっかりと自覚し、自分の果たすべき役割に誠

心誠意、全力を尽くしていくことの大切さを「中庸」の言葉は教えてくれます。

まったく同じことを私たち道の子は、おやかたさまから教えられています。

はなわ
塙

ほ
保

き
己

い
一

——江戸時代の盲目の国学者——

静岡 内藤 吉隆



私が二十代半ば、今から三十年ほど前に、仕事で埼玉県川越市にある埼玉県立盲学校へ伺っていました。その後担当が変わり、たまたま仕事で近くに行き、道路標識に埼玉県立特別支援学校塙保己一学園とあり、調べてみると平成二十一年（二〇〇九）に改称されていることを知りました。その時に初めて塙保己一の名前を知り、読み方がわからず《はなわほ・きいち》だと思っていました。《はなわ・ほきいち》と読みます。

皆さんに塙保己一を知ってもらうために、へ

レン・ケラーとのつながりを知っていただくことから始めます。そのヘレンが、人生の目標として尊敬した日本人が塙保己一です。

アメリカの教育家・社会事業家のヘレン・ケラー（一八八〇〜一九六八）の名前は、世界に広く知られています。目が見えず、耳が聞こえず、話すことも難しいという困難の中で、言葉を覚え、知識を身につけ、二十一歳でハーバード大学附属のラッドクリフ女子大学に入学。その後は、視聴覚に障がいを持つ人たちに対する偏見や差別をなくすため、アメリカ国内はもと

より世界各国で講演を行ったほか、数々の福祉事業の発展に生涯をささげた人です。

彼女は日本を三回訪問しています。日本と中国との関係が悪化し、暗雲立ち込める昭和十二年（一九三七）、日本が戦争に負け、国中が混乱していた昭和二十三年（一九四八）、そして晩年の昭和三〇年（一九五五）です。

日本各地で講演会が開かれたのですが、昭和十二年に埼玉県を訪問したヘレン・ケラーは、埼玉会館で開催された講演会でこう話しています。

「わたしは特別な思いを抱いて、この会場にまいました。いつか日本に行つてみたい、日本に行つたら必ず埼玉を訪問したいと長い間思っていました。その夢が今日叶いました。それは、わたしが人生の目標とし、苦しく、辛く、くじけそうになったときに心の支えとした人が、こ

の埼玉ゆかりの人物であつたからです。その人の名は『塙保己一』といひます」

ヘレンは、その塙保己一について次のようにも述べています。

「私がまだ小さいとき、母は塙先生のことを、繰り返しこう話してくれました。『ヘレン、日本には幼い時に失明し、しかも点字も何もなかった時代に、努力して学問を積み、一流の学者になつた塙保己一という人がいたのでですよ』と。時にはくじけそうになつたこともありましたが、この母の励ましによつて、現在の私があるのです」

ヘレンは保己一の精神に共鳴し、「目は見えなくても、心の目で未来を見通すことはできる」と語つたと伝えられています。ヘレンが目標としたこの日本人は、どういう人物だったのでしょうか。

塙保己一は、江戸時代の後期、視力を失いながらも学問に打ち込み、後世に残る偉業を成し遂げた人物で、その名は今も日本の歴史と文化に刻まれ、国学者、漢詩人、また書家です。国学とは、仏教や儒教などが日本に伝えられる以前の、日本特有の文化や心の在り方を明らかにしようとする学問です。

保己一は一生の間に何度も名前が変わっています。本稿ではすべて保己一にしました。

保己一は延享三年（一七四六）に武蔵国児玉郡保木野村（現在の埼玉県本庄市児玉町）で生まれました。幼い頃は健康で、田畑を駆けまわる普通の農家の子どもでしたが、七歳のころに病気で失明しました。しかし勉強好きで記憶力のよい保己一は、悲嘆に暮れることなく、「目が見えなくとも、耳と心で学べる」と信じて、自らの知の道を歩み始め、学問で生きること

決意します。

十五歳で江戸にて、「当道座」（目の不自由な人たちによる組織）の最高の役職・検校けんぎょうについていた雨富須賀一あめとみすがいちのもとに弟子入りし門下生となり、学問を始めました。

雨富検校は、当時、目の不自由な人の仕事とされていた三味線や琴、鍼やあんまなどを行う人々を監督していました。ところが学問好きの保己一は、その生活になじめません。十六歳の時に悩み苦しんだ保己一は、川の淀みに身を投げてしまいました。幸い一命はとりとめたものの、仲間内では「落ちこぼれ」扱いされたのでした。

しかし、保己一の望みを知り、その才能を見抜いた雨富検校は、「三年間だけ好きな学問をしてよい」と言って励ましてくれました。意欲を取り戻した保己一は、雨富検校のもとで歌学

や神道を学び懸命に勉学に打ち込みました。

宝暦十三年（一七六三）衆分（※1）となり、安永四年（一七七五）勾当（※2）に昇進した際に、雨富須賀一の本姓である「塙」を称することを許され、「塙保己一」と名乗るようになったのです。

人並みはずれた記憶力を持つ保己一の噂は広まり、やがて国学者・賀茂真淵かものまぶちに師事し、古典の読解と研究に没頭するようになりました。保己一の耳は鋭敏で、師の語る一言一句を聞き漏らさず吸収したといえます。縁が縁を呼んで学者への道が開けていき、やがて大学者として世間から認められるまでになったのです。

保己一は、いったん大きな挫折を経験したことから、その際に自分を支えてくれた師匠の温かさや多くの人々の励まし、その大切さ、大きさに気づきます。そのため彼は、自分に与えら

れた能力と人生を、自分のためではなく、人々のため、世の中のためにささげることが決心しました。

三十四歳のとき、保己一は各地に散らばる貴重な古書を集めて本にすることを志します。放っておけば失われてしまう古書の研究こそ、自分のなすべき仕事であり、しかも後世の人々に役立つものだと考えたのです。それから四十年後、七十四歳のときに完成したのが、『群書類従』です。

『群書類従』は、平安時代から江戸時代初期までの日本の歴史書、法律、政治、経済、文学、医学など、あらゆるジャンルの貴重な史料が収められた六百六十六冊に及ぶ大全集です。視力を失った保己一が、膨大な文献を人に読んでもらい、それを聴いて整理し、内容を分類するという気の遠くなるような作業を続けた結果であ

る。この事業は、後の国文学や歴史学の基礎資料として今なお活用され、特に日本の故事を研究するために欠かせない書物になっています。

さらに、寛政五年（一七九三）には、国学の研究の場として「和学講談所」を創設し、多くの弟子を育てました。自分と同じように障がいのある人たちの社会的地位向上のために全力を注ぎ、文政四年（一八二一）二月に目の不自由な人たちの最高位である総検校に就任し、同年十月に天命を全うしました。

塙保己一の生涯は、障がいを持ちながらも学び、働き、社会に貢献することの尊さを私たちに教えてくれています。そしてその精神は、時代や国境を越えて、今もなお人々の心に灯をともしています。

- ※1 衆分…当道座の役職のひとつ
 - ※2 勾当…検校の下に続く役職
- （参考文献等）

- ・埼玉県立特別支援学校

塙保己一学園ホームページ

- ・学校で学びたい日本の偉人

貝塚茂樹・柳沼良太（育鵬社）



『教導立志基』「塙保己一」（水野年方筆）。『源氏物語』の講義中に蠟燭の火が消え、慌てる弟子たちに「さてさて眼明は不自由の者かな」と冗談を言った場面を描く。（Wikipedia より）

この道とおる

アンパンマンの魅力

——意外にも日本文化が基底に?——

東京 佐瀬康志



朝ドラ『あんぱん』

NHKの朝のテレビ小説『あんぱん』は、絵本・アニメの『アンパンマン』の作者やなせたかし氏と妻・小松暢の実在モデルを描いたドラマです。

テレビ小説の前作、『おむすび』（橋本環奈主演）とは打って変わって好評を博しているようです。うちでも家族で見えています。

「アンパンマン」は、熱狂的な人気があり、日本の子供たちに三十年以上にわたって愛され続

けてきました。

横浜や神戸にある『アンパンマンミュージアム』も、連日盛況と聞いています。

うちの孫も大好きなアンパンマンは、いったい、どこに魅力があるのだろう、と不思議に思いました。

日本文化の存在

日本の子供たちにとって、変わらぬ人気のキャラクターですが、アンパンマンの魅力は、

シンプルなストーリーと明確な勧善懲悪のテーマにあるとも言われています。そういえば、水戸黄門のストーリーと似たところがあるような気がします。

また、その人気の秘密は、意外と日本の文化に根ざしている点があるようです。このアンパンマンのストーリーは、例えば、自己犠牲の精神を体現している点があります。

アンパンマンは、「正義の味方」として、多くの困難に立ち向かっていきますが、彼が自らの顔を分け与えて他者を助けるといふ行為は、まさに自己犠牲の精神を象徴しているという訳です。

もうひとつ、アンパンマンの物語には、悪役のバイキンマンにも温情が加えられることが多いのです。バイキンマンは悪行を働きますが、単に退治されるのではなく、時には助けられた

り、彼に対する理解が示されたりするのです。

このような描写は、「情」を反映しており、単なる悪役ではなく、共に生きる仲間であるという視点を持たせることで、物語に深みを持たせています。

日本人が持つ温情や思いやりの心を表現する、このアプローチが、アンパンマンの強さと人気を、さらに高めている、のかも知れません。

一方で、アンパンマンが海を渡り、アメリカではどう思われたでしょうか？

報道によると、その内容が「暴力的」として受け止められ、一時、放送が控えられたこともありました。アンパンマンは、敵役であるバイキンマンと闘う姿が強調されるため、外部から見ると暴力の要素が強いと捉えられがちです。

日本では、この戦いが悪を懲らしめる正義の行為として理解され、子供たちに道徳的な教訓

を与える役割を果たしているのです。

この違いは、日米の文化の根本的な相違を示す興味深い例と考えられます。正義と悪の関係やそれに対する反応が、文化によっていかに異なるかを考えさせられます。

アンパンマンの人気は、単なるキャラクターの魅力に限りません。今回、日本の文化や価値観に根ざした温情ある物語に支えられているのではないか、と思わせられました。

アンパンマンの人気の秘密は、日本の文化的な心情が基底にある、そんな気がしたのです。

— 明治の紫式部 —

下田歌子

神奈川 芹澤和彦



「下田歌子」といつても、今の人はほとんど知らない。石川啄木は、一九〇七年（明治四十年）に『小樽日報』に「淡紅色のリボンを叔母さんに貰って、鼠泣きする十二、三の娘子供でさへ下田歌子の名を知らぬはなし」と書いている。そして「女史は、一個の怪物なり」とも書いている。

下田歌子は、歌人であるとともに、華族女学校や実践女子学園をはじめ、多くの女学校の設立・運営に当たった女子教育家であり、愛国婦

人会、東洋婦人会など、いくつもの婦人団体を代表した。

歌子は安政元年（一八五四年）、ペリーが、二度目の来航で日米和親条約を締結した年に、岐阜県の岩村藩士平尾録藏の長女として生まれた。幼名を鈿せきという。幕末の岩村藩は、佐幕派が主流であったが、父は勤王派だったので、藩に生まれ蟄居謹慎を約十年も命じられ、暮らして困窮し、食事にさえ苦労した。

そんな環境のなかでも、学問に励み、小太刀

や柔術まで身につけた。歌子は幼少より手当たりしだいに本を読み、四歳で和歌を詠み、六歳で俳句を始めた。四歳のときの歌が知られている。

元旦はどちら向いてもお芽出たい

赤いべべ着て昼も乳呑む

いかにも子供らしいと、周りの人々が大笑いしたという。

蟄居を命ぜられていた父は、維新で自由になつたばかりか、勤王派だつたゆえに立場が逆転し、新政府に職を得て上京。下谷の警察署の教師になつた。歌子は十八歳で父のあとを追つて東京へ出た。そのときの決意の歌がさまざまに。尾張の三国山近くで詠んだのだろう。

綾錦 着てかへらずば 三国山

またふたたびは 越えじとぞ思ふ

「男子が大望を抱いて郷閩を出るときの気概」を彷彿する氣宇壮大なうたである。

東京での父は警察勤務のかたわら、歌人の八田知紀はつたのりに師事し、和歌を詠んでいた。父は歌子の歌才を認めていたから、さつそく師の八田に引き合わせ、作品を見せつつ、歌子の将来についても力添えを依頼した。

結果はすぐにあらわれた。明治五年十月、八田の紹介で、女官として宮中に出仕することになった。宮内省十五等出仕と呼ばれる、高等女官の中では最も下の地位である。それでも歌子は幸運であつた。今までなら、女官は公卿の娘と決まっていたからだ。それを西郷隆盛さいごうたかもりが宮廷の改革に着手して、士族の娘にも女官の道を開

放したのだ。

出仕すると歌子の歌の才が開花する。宮中の歌会で「春月」との題が出された。彼女の歌は、

大宮の玉のうてなにのぼりても

なほおぼろなり 春の夜の月

手枕たまくらは花のふぶきにうづもれて

うたたねさむし 春の夜の月

で、周囲の絶賛を浴びた。皇后も激賞し、本名の銘は堅いから、歌詠みの「歌子」にしなさいと名まで賜わったのである。常に女官はすべて平等に扱いなさい、と言われる皇后だが、歌子のことになる。別で頻繁に彼女をお召しになった。御下賜品も歌子が群を抜いていちばん多かった。

さらに周囲の人々を驚かせたのは、出仕二年目で「御書物掛」をおおせつかったことだ。読書好きの才女は、以前にも増して、古典の教養が深くなっていた。驚くのは、そればかりではない。皇后は、帝との御進講の席にも歌子をお連れになった。そこには明治二十三年に「教育勅語」の原案を練った漢学者の元田永孚もとながぎねや学者の福羽美静ふくはびせいなどの面々が練りに練った講義を展開していた。歌子は目を伏せたまま、じつと後ろに待って、日本国最高の授業を受けたことになる。これでは、教養がいつそう深まり、他の女官は、とても及ばない。「皇后様は、歌子ばかりお可愛がりになる」と嫉妬混じりの声があつても、学問好きの皇后は、彼女を側に置きつづけた。

歌子の宮仕えは、明治十二年十一月まで、約七年におよんでいる。同年十二月、歌子は旧丸

亀藩士の下田猛雄しもだたけおと結婚した。だが、その結婚は決して幸せとはいかなかった。猛雄は劍客として知られ、父の知人でもあった。彼は東京市内の警察署に出張し剣法を教えていたが、時世に乗り遅れたことで鬱々としたものをはらいのけようと酒におぼれていった。若いころの深酒に慣れていたことが変な自信となつたのがいけなかつた。結婚してしばらくして、猛雄は血を吐いた。胃癌の始まりであり、病床につくことが多くなつた。

病床の夫の看病をしつつも歌子には気になることがあつた。それは宮中に仕えていたときに、上流子女たちが、精神的に弱々しく見え、新しい激動の時代に適応できないのではないかと、ということであつた。そこで結婚後の明治十五年、歌子は上流子女のための私塾（桃夭女塾とうようおんなじゅく）を開いた。

日本古来の婦徳も教えてくれ、それでいて明治という新時代の意味も、しっかりと子女たちに把握させてくれる教育、これができるのは歌子をおいて他にない。このことを熟知していた伊藤博文や土方久元など、政府高官の多くは喜んで支援してくれた。広く知られた伊藤博文いとうひろぶみたちの声で華族高官の子女が多く集まるようになった。歌子は「源氏物語」を朗々とした声で読みながら講義した。また、アメリカ帰りの津田梅子つただうめこは流暢な発音の英語を教えた。授業の最中に歌子を呼ぶ病床の猛雄の大声が聞こえたり、排便の世話をしたりと苦勞の連続だったが、献身的な看護の歌子の様子を目の当たりに見た子女たちは感銘を受けた。

明治十七年五月、夫猛雄は帰らぬ人となつた。歌子が三十一歳のときであつた。夫が亡くなり、歌子はありきたりの寡婦になるはずだった。し

かし、特別な辞令が皇后からおりたのだ。それは宮中御用掛として、もう一度参上せよ、ということだった。ここに至るまでには、伊藤博文の支援と大きな期待があつたのは言うまでもない。そのころ、皇后の令旨（りょうし皇太子や皇后などが出す命令）により、帝の許可も得て「華族女学校」の設立が計画されていたからである。呼ばれた彼女は、その奏任官に任ぜられ女学校設立に参画することになった。

ことは順調に進み、翌年の明治十八年、開校のはこびとなつたので、歌子は「桃夭学校」を廃して、華族女学校の教授兼学監となる。校長につぐ者として、学校運営と生徒の訓育を担当することになる。年俸千円というびつくりするほどの厚遇である。このとき、津田梅子は、彼女の補佐役として登用されている。歌子は、いくつもの講義を受け持つと共に、教科書まで手

掛けた。

明治二十六年九月、歌子は華族女学校教授在職のままヨーロッパの先進国の「皇女教育」と各国の女子教育の視察のため遊学することになった。

二年間で、イギリス、フランス、ベルギー、スウェーデンなど八カ国を廻り、女子の家庭教育や学校教育を視察した。

各国視察中、特筆すべきことがあつた。イギリスのヴィクトリア女王に日本の女性が初めて謁見することができたのだ。その時の衣装がものすごい。なんと平安朝の官女の正装なのである。ヴィクトリア女王といえは、日本より小さな島国のイギリスを世界一の大国にしたことで有名である。当時の大国といえは、ロシア、フランス、オーストリア、プロイセンですが、断トツに強いのはイギリスでした。その国の女王

は「ヨーロッパの祖母」とも呼ばれた。ヴィクトリア女王は、周辺の国々の王様と親戚だったと言っても過言ではありません。プロイセンのヴィルヘルム二世は彼女の初孫です。ニコライ二世の妃はヴィクトリア女王の孫娘です。

これではどんな才媛の歌子でも気後れがするのは当然のことでしょう。そこで考えついたのが、我が国の皇室は、ヨーロッパ随一の貴国より、ずっとずっと古い伝統の国である、ということとを意識付けるために、千年も前の衣装を取り出したのではあるまいか。そんなことには全然気づかない青木周蔵英公使は、かんかんになって怒った。

「私に恥をかかせるつもりか。ここは大英帝国の首都ロンドンである。十九世紀の今、そんな骨董品はすぐに日本の博物館にでも返してしまいなさい」

歌子は、髪を垂らした「おすべらかし」に、桂衣うぢぎ、緋色袴をつける。馬車でバツキンガム宮殿に向かう。玄関口に大勢の新聞記者が待ち構えていた。歌子の王朝衣装にびつくりしたのか、どよめきが起こり、慌てて写真を撮りまくった。緊張の中でも女王との対話ははずんだ。内容の一部を紹介する。

- ・ 皇子皇女の研究にいらしたとうかがいました。が、イギリスの王族教育についての感想は？
- ・ 皇族方は軍務につかれていますか。
- ・ 日清戦争勝利、おめでとうございます。戦中陛下はいかがが過ござれておりましたか。
- ・ 両陛下の大本營での過ござれ方、ご立派なことで、私どもとしても見習わなければならぬことが沢山ありました。教えて下さり有り難う。

歌子のよどみないお応えに、女王は、開国し

て三十年に満たないのに、大国の清を打ち負かすほどの国を作り上げた日本、今まで接したアジアの国とは、全く違うことに気がついたようであった。

諸外国の教育事情を知り、帰国後彼女は、次のようなことをいつている。

婦人の教育が如何に大事か、殊に中流以下の、いわゆる大衆婦人の教育が、真に国家興隆の基であることを確信した。現在の日本に、それがいかに緊急に必要なかを思い、帰国後の今、自分は、この方面の婦人の教育に尽力したい。そして、「修身齐家」に必須である実学を教え、良妻賢母の養成に力をかたむけるつもりである。

明治の婦人問題という、すぐ出てくるのが、旧道徳から女性を解き放つべしと叫んだ平塚雷鳥や福田英子ひらつからいちょうが真つ先まきさきに挙がる。歌では、官能的で世を驚かせた与謝野晶子よさのあきこなど、翔とんで

いると言つたら分かりやすい女性が輩出した。これに対して、歌子の良妻賢母論は、かつての儒教道徳に基づく前近代的思想と見なされ、今日に至つては、性役割を固定し、女性を抑圧するものとみなされやすい。

しかし、歌子は家政を女性の「天職」とし、主婦を家庭の中心として位置づけた。そして、主婦が担う家政は、男子の行う「国事」と異なるところが無いとして女性の役割の重要さを強調した。

さらに、主婦としての役割を果たすことは、女性の国民としての責務であり、社会の基盤となる家庭を築くことこそ国家の発展につながることだとの強い信念をもち続けた。

歌子の持論を具現化するために、実践女学校が明治三十二年に創立される。そこでの良妻賢母の教育は高く評価され、中国からの女子留学

生を迎えるほどの開明性をみせた。

「新しい女」を作る前に「古い女」を完全なものに作りあげるのが、本当の教育であるという彼女の念は、今日でも通用するし、もつと重要視していいと言つていいでしょう。

明治三十九年、歌子が二十数年にわたつて活躍してきた華族女学校は、学習院女学部となり、乃木希典が学習院長として就任する。

下田歌子は、歌人であると共に、私立実践女学校や女子工芸学校の設立。順心女学校、愛国夜間女学校など十三校以上の設立や運営に当たつた。

また、明治天皇の第六皇女常宮昌子内親王と第七皇女周宮房子内親王の御用掛でもあつた。そればかりでなく、帝国婦人協会や東洋婦人会など、いくつもの婦人団体を束ね、愛国婦人会の会長として七年間も努めた。

教育事業家でもあり、婦人団体をまとめた社会事業家でもある歌子であるが、その傍ら、歌集や教科書、国家の基盤となる家庭論など多大の著作もあり、明治の女性としては、飛び抜けた存在であつた。

ただ一つ惜しいことは、彼女が伊藤博文や山縣有朋などと共に「平民新聞」などで叩かれ、特に歌子については「妖婦」などとセクシャル・ハラズメントと言つていいほどの悪質な攻撃を受けたことである。彼女の抜群の功績や人物像が、それにより一部歪められて伝わつてしまつたことは、残念の極みである。

歌子が昭和十一年、八十三歳で逝去して間もなく徳富蘇峰は、歌子について、天は彼女に才華と詞藻（詩歌・文章の才）と、容貌と健康を恵んだ、と書いている。

〈参考文献〉

女人絵巻

澤田ふじ子（徳間文庫）

明治・大正を生きた女性

中江克己（第三文明社）

ミカドの激女

林真理子（新潮社）

其の一日 近代日本偉人伝福田和也（新潮社）



絵画「メタセコイヤ並木道」 愛知 高橋佳孝さん作

編集後記

自分を拝む

「常世の理」と「自分を拝む」

- ◇今月のテーマは「自分を拝む」でした。
- ◇「自分を拝む」を「根の索引」で引くと、どういう訳か、「常世の理」のご垂示（根七〇号 二十七頁）が出てきます。どういう関係があるのでしょうか。
- ◇「常世の理」とは お肚の奥から知らず 色々知らず 「そうなるのが この道であつた」
- ◇私たちはこの道で、みたまどおりになるお行をしています、段々、みたまどおりになるにつれ、自分のお肚から何でも知らされるようになり、そんな有難い自分をそのうち、拝むようになる、ということのようです。
- ◇これはある意味、あたらしい道の真髄を言つて

いるものと思えます。

- ◇「もうこれ位で 自分として 自分を拝む そういう時が 何れある」 「それがこの道」とあります。

神道の「自霊拝」

- ◇日本の神道では、「自霊拝」という「行」があります。
- ◇伯家神道という、天皇行としての御鏡御拝は、つまり、神鏡に映る己の姿を拝する行で、みたま磨きの行として「自霊拝」とも呼ばれ、神道の奥儀として尊ばれているといえます。
- ◇天皇行としての御鏡御拝を行っていくと、次第に天照大神の魂に近づいていきます。
- ◇実は恐れ多くも、同様のことが我々についても言えるのだと言います。天皇行は「自霊拝」として、全人間に当てはまると言われています。
- ◇戦後、昭和天皇がいわゆる人間宣言をされたのちも、陛下は現人神にましますという、まる

で憲法違反をしているかのように罵る人もいるかも知れません。

◇しかし、神道理論的には、戦後史の事実と関係なく、今も天皇は現人神なのだと思います。

◇神道では人間は皆「神の子孫」であり、同時に神になりうるみたまの契機を持つている、と言われます。

人をもって祭壇

◇また、この道では、「人を以って祭壇」といいますが、道には、拝むべき祭壇はないという意味であり、また、磨かれ切ったみたまを持つ道友そのものが、「祭壇」なのだという意味もあると思われまます。

◇物や人を拝むのではなく、色々のことを知らせてくれる、有難いみたまになった道友が、いわば、祭壇に当たるという意味です。

やかたに似る

◇根七〇号の「常世の理」では、常世の理そのものを順序立てて全体を説明されています。

◇まず、いま世の中は舶来式になっています。この道では、「こういう時代に 日本々々(日本式)を叫んでいる」。つまり、道友は正反対のことを叫んでいる訳です。

◇そのことが既に——闇の世に火を灯す——常世の理であり、「常世の理とは 自分で自分に云い聞かして」「この道通る」しかありません。

◇それから「もう一つ 上があるんです」「何もかも やつぱり やかたに似るんだ」「それが順序です」

◇「お肚の奥が 有難いんですよ」

「この道はな 自分のお肚で 一切合切を教えてください」

◇このあたりが、「自分を拝む」につながるところでしょう。

神代の頃は皆みたまたった

◇別のご垂示で、「神代の頃は皆んな みたまたったったんですからね」「それが段々 心になつて来て それでしにくくなつた」と言われています。ここでも、

◇「昔は神代の頃は 自分の口では何も云えない」「肚の方から 聞こえるから」「順々順々 事を運んだ」

◇「声にならない 言葉でないから 黙つたまんなり出した」 「その内に 大きな声で うなり出した」 「さあ それが始まりです」

◇「この道によつて 段々段々 披露されて」「言葉になつて 音でございます」

◇最後に、「この道がな 成程な 雛形です 嬉しいだろう」

闇の中、火を灯す

◇常世の理ですが、根四十七号では、「常世の理とは、闇の中、火を灯す。手を取り合つて皆さ

んから喜んでもらう」とあります。

◇「誠の方がみたまたまそのものになつて みるくの世界に どんどん誠で理をお知らせになるとね 喜んでお聞きになつたら、向こうのみたまたまさんもみたまたまそのもの変わるはず」とあり、

◇これは、日本の理を誠でお伝えすることで闇に火を灯すことになる、元の日本に還る、という意味だと思ひます。

◇この、日本の理——日本のよいところ——を人さんにお伝えすることが、いつの世でも闇に火を灯すことになる、それはずつと変わることがないのだから、そのことを「常世の理」だ、という。

◇いつの世になつても、例えば、日本の良いところをお伝えするだけで闇の世に火が灯る、そうなるのが、常世の理なのでしょう。

◇お肚から色々知らされるようになり、有難い自分を拝むようになつて、誠で人さんにお知らせすると、相手もみたまたまそのものになる。

◇そんな古い国日本には、掘り起こせば沢山、いいものが埋まっています。お肚から知らされる、その日本のいいことをお知らせすれば、日本人はすぐに目覚め、その人の肚に灯が灯るのです。◇それはいつの時代になっても通用すること、それが常世の理と言われているのではないでしょうか。

〈参考図書〉

「面白いほどよくわかる神道のすべて」

菅田正昭 (日本文芸社)

季刊誌「あたらしい道」のご購読は

お申込みは、各支部毎にまとめて、左記にご連絡下さい。

(年4回、6月、9月、12月、3月の各月8日に発行。各発行月の前月15日までにお問い合わせ致します)

申込先

あたらしい道本部

電話番号 0729 (56) 7971

FAX 0729 (57) 5100

季刊誌「あたらしい道」 令和7年秋号

令和7年9月8日発行 (第544号)

発行責任者 中井 健

編集責任者 柳田 泰

発行所 一般財団法人 あたらしい道
大阪府羽曳野市はびきの3-3-18
〒583-0872 TEL: 0729 (56) 7971

印刷所 キクイ印刷工芸社
大阪府羽曳野市古市6-12-9
〒583-0852 TEL: 0729 (56) 6881

季刊誌「あたらしい道」

令和七年秋号

第544号

(2025年)

発行／一般財団法人あたらしい道